

スー・ヤングさんへのサポートグループについてのインタビュー

Coert Visser & Sue Young



現在スー・ヤングは学校での行動支援活動と解決志向の実践トレーニング

に自分の時間を振り分けています。彼女は学校のあらゆる学年で成功を促すために解決志向の考え方をを用いることを推進しています。彼女は国の方針を学校に紹介し実施すること、生徒にポジティブな行動を促そうとする地元職員の手助け、そして個々の子どもや保護者への支援に取り組んでいます。スーが特に関心を向けていることのひとつにいじめに反対する精神を育むことがあります。90年代の中頃に、彼女はいじめ事件の発生を受けてサポートグループアプローチを生み出しました。その後そのアプローチが解決志向の考え方にとっても一致していることに気が付き、それ以来彼女のあらゆる活動に解決志向の原理をあてはめています。「サポートグループアプローチとはどんなものなのでしょうか?」「それはどのような仕組みになっているのか?」「それを行うのは大変か?」「そのアプローチはどのように役立つのか?」これからのインタビューでこれらの質問の答えを明らかにしていきます。

コート スーさん、こんにちは。サポートグループのことをまだ聞いたことのない読者のために説明していただけますか。

スー 簡単に言うとサポートグループは特に小学校におけるいじめに関しての苦情の申し立てに対して行う、解決志向に基づく方策（ストラテジー）です。

これは“解決の鍵”のとても良い例だと思います。なぜならそのシンプルであるがゆえに幅広い状況への適用が可能だからです。

困難を抱えている生徒にはその時点で付き合うのが難しいのは誰か、その難しい場面で周囲にいたのは誰か、その友達を誰かを聞きます。

どんなことが起きたのかについては全く話を聞きません。その生徒には、事態が良い方向へと動き出すことを約束し、挙げられた名前の生徒の中から何人かを選んでグループを結成し、そのグループがあなたを助けてくれるわよと話します。その生徒にはどんな些細なことでもいいので良くなったことに着目しておいて、1週間後に話を聞くとときに報告してほしいと伝えます。サポートグループは名前の挙げた、理想的には5人から8人の生徒で構成されます。グループとは問題を抱えた生徒とは別々に会い、対象となる生徒が学校で幸せになることを目標として支援するように求めます。その生徒がどうして幸せではない

のかについての説明は一切しません。その面接を誰がリードするにせよ“いじめ”という言葉は一切使わないこと、対象児童に起きている出来事に対するいかなる判断もこのグループには持ち込まないことが大事です。彼らにはやってみようという小さなことを提案するように求めます。そして一週間後に彼らがどんな努力をしたのかについての話を聞くために集まってもらう手配をします。

コート では一週間後、いじめられた生徒との振り返りのための話し合いとサポートグループとの話し合いはどのような内容になりますか？

スー 1週間後の話し合いでは、対象となった生徒に良くなったことはどんなことかを尋ね、状況に対してその子が対処してきたやり方をほめます。

その後のグループとの検討会では、状況がどうなっているのか彼らの考えを聞き、個々のメンバーそれぞれがどんな工夫や努力をしたのか発言できるようにします。

メンバーそれぞれに対してその支援に感謝の意を伝えグループとしての成功に対してもお祝いの言葉を述べます。もし必要なら次の話し合いを翌週に設定します。時にはいじめやからかいが完全に終わっていることを確認するために話を聞く機会が1回以上必要となることがあります。この場合のいじめやからかいは、サポートグループ外の生徒によるものであるケースがほとんどです。しかし話を聞くことが5回以上になることはまずありません。サポートグループを終了する基準は、対象となった児童、グループのメンバー、学校で関連ある教職員と保護者全員が、困難を抱えていた生徒が学校で現在は幸せに過ごしていると賛成することです。

コート どんな内容かが分かりました。では他のいじめ対策のアプローチと比べてこのアプローチの主な特徴や利点についてはどうお考えですか？

スー 何が起きているのか、生徒に話してもらう必要がないことです。状況を再度話させることは、既に無力感をおぼえて、自分がどんな気持ちかを誰かに伝えることに不安を感じている生徒に再度トラウマとなってしまうたり、自信を失わせてしまうデメリットを伴います。さらに、気持ちを話すことで実際その感情が強化されてしまうことにもなるでしょう。

また誰かに“いいつける”必要がないので、その生徒にとってリスクを負うことはありません。他の多くのアプローチではいじめがあったことを前提としていますが、実際にそれを確かめるのは難しいものがあります。なぜなら、通常いじめは大人の目の届かないところで起きるからです。いじめが起きていることを知っている他の生徒がそれを報告することは滅多にありません。そしていじめで糾弾される生徒はそれを否定するものです。ですから、いじめを“証明すること”はとても困難です。幸いこのアプローチではその証明を必要としません。と言うのは、このアプローチでは何が起きたかについて仮定する必要がないからです。同時にどの生徒も“いじめっ子”“被害者”といったラベル付けもされませ

ん。一方もし本人が望むなら、お詫びのしるしとして何かをする機会は提供されています。これは驚くべきことに対象となっている側の生徒にも当てはまることまあります。

コート 保護者の関わり方には他のアプローチと比べてどんな違いがありますか？

スー もし保護者が苦情を述べてきたなら、状況がどうなっているのかについて最新の報告を定期的に行い、進捗評価に参加してもらいます。

これは困難な時間を過ごしている彼らにとって安心材料となります。これまでの手法では保護者は外されて報告がもらえずかえって困難な状況に拍車をかけてしまうことしばしばありました。これまでの手法では、保護者が“過保護”だとの非難をうける結果となることすらあります。他の生徒の保護者に彼らの子どもがいじめで非難されているとの話をする必要はありません。そうすると結果としてもともと寄せられていた苦情より、保護者間のいざこざの方がさらに大きな問題となってしまいます。反対に、保護者には子供たちのとても援助的で優しい面の話をしてします。学校がいじめに対して効果的な対応を取っていることは、保護者に伝わります。多くの保護者は自分の子どもにいじめが起きるのではないかと恐怖を感じているので、その情報を高く評価します。

コート サポートグループへの子どもたちの反応でよくみられるのはどんなものですか？

スー とてもそれを楽しんでいます。サポートグループに加わった生徒に話を聞きましたが、彼らはこのように言っていました。「とても楽しかったです。友達が増えました。」「自分がとても重要な役割をもっているんだなと思えて、前より幸せな気持ちになれました。」このアプローチは他の人とのもっと援助的な関わり方や自分を誇りに思えるような方法を、生徒たちに教えます。長期間これを続ければ（もしくは、「長い目でみれば」）学校全体の精神に影響を与えうるアプローチです。他のアプローチ、例えばアサーショントレーニングは“被害者”を責めるニュアンスがありますが、もしいじめがなくなればアサーションや自己効力感の低さはもはや問題ではなくなります。このアプローチはいじめをなくすもっと簡単で即効的な方法なのです。

コート とても簡単で魅力的な方法のようですね。このアプローチの効果についてはいかがですか？ 例えばこれまで効果検証を行ったり、体系的な報告を得たりしていますか？

スー このアプローチはたくさんの実際のケースに使用され、効果を検討されてきました。（私たちが評価している解決志向以外の）他の多くの手法では結果に基づく評価がないのに対して、このアプローチはよい結果を出しています。早く効果がでて、長い期間その効果が持続します。

例えば従来のカウンセリング、電話相談、加害者への処罰など、他のアプローチはプロセスそのものに効果があると想定しており、少ない事例に基づいた効果検証しかありません。その頃私が書いた論文では、二つのタイプの研究について書いています。結果から評価す

るものとプロセスから評価するものです。まずもっとも大事な結果に基づく評価についてですが、私の行った50のサポートグループの80%(40件)ではすぐに効果があり、関与は次第に減りました。7ケースでは、全員が「サポート対象となった生徒が学校で幸せで、一切いじめがなくなった」と満足するまでに5回の話し合いを開きました。私はそれを“遅めの成功”(delayed success)と呼んでいます。残りの3ケース(6%)は、改善は見られたものの完全に満足出来るものではありませんでした。私はこれを“限定的な成功”と呼んでいます。大事なことは、悪化したケースがないことです。話は少しそれますが更に興味深いことに、学校内の職員によって運営されたサポートグループの方が、結果が良いことがわかりました。それは80%以上の成功率で、他の人が運営するよりも平均的に少ない回数で終わりました。

この調査は今から10年前のものではありますが、サポートグループより結果が勝っていたり、同様の成果を収めていたり、より多くの成功例があったりするいじめへの介入法にまだ出会ったことがありません。(以前のSFBTの会議でゲイル・ホルドルフとともに発表したものを除く。)ですから私はこの論文に満足している一方不満もあります。いじめに対してのすべての調査は、“問題を重視しているもの”であって個々のケースにおいていじめをなくすのに何が役立つのかについての調査が大変少ないのです。

コート サポートグループを実施した教員の実例をご紹介しますか？

スー 中立的な共同作業と言う意味で(教員たちと互いの専門を尊重して協力しあうという意図で)、私は特に問題を抱えた小学校の補助教員に対してサポートグループ運営についての指導を行いました。

彼女は素晴らしい記録を書き残していて、後に私は彼女の許可を得てそれを見せてもらいました。その記録によれば彼女は50ケース以上に関わっていて、そのどれもが目覚ましい成果を上げていました。しかし彼女は常に話し合いを5回開いていました。もう問題はないと記録されているにもかかわらずです。彼女は純粹に、このグループ運営が楽しくて仕方なかったのだと思います！この学校ではサポートグループのことを“フレンドリー・グループ”と呼んでいました。私は彼女の業績を「学校での成功」(Solutions in Schools)で紹介しましたが、残念なことに彼女はお名前を載せるのは遠慮されています。これ以外にもこのアプローチを使ってとても満足しているとの様々な報告が寄せられています。もちろん残念ながらうまくこのアプローチを使えなかった人は報告してこないでしょう。にもかかわらず、これまでたくさんの方がこのアプローチを使ってみて、初回から効果をあげていますし、この方法は効果の高い強力な方法だとの確信を得ました。

コート 先ほどプロセスリサーチについてお話しされましたがそれについてもご説明いただけますか？

スー はい。私はサポートグループで起きているプロセスについての調査を行いました。この理論は社会心理学におけるものでグループや傍観者の行動がどのように機能するのを見るものです。

私はなぜこのアプローチがうまく機能して、それもそんなに即効的なのかについて論理的に説明できる方法を探していました。この調査研究を行っている際に“解決志向ブリーフセラピー”に出会いました。私が行っていることは、セラピーではありませんが、解決志向の良い実践例であるように思えました。また最近では、サポートグループに加わった生徒がこのアプローチについてどう考えているのかについて、インタビューを行い、その様子をビデオに収めました。インタビューに参加した子どものうち2人をクラカウ（ポーランド）でのEBTA (European Brief Therapy Association) の会議に連れて行き、ワークショップでの発表に参加してもらいました。彼らの発表はとても素晴らしかったです。学校で誰かが幸せでない状況ならば、他の生徒に助けを求めるのは彼らにとってごく当たり前のことのようにです。もちろんこの方法はうまくいきますし、もちろん参加した子達も楽しい。なんでこんな当たり前のことがわからないんだろうという表情でしたよ。

コート まったくその通りですね。さて、精神的暴力、肉体的暴力が絡んだ状況での応用経験はありますか？ その場合も他の時と同様にサポートグループアプローチを活用することを勧めますか？ それとも何か特別に付け加えたり異なる手段をとるべきでしょうか？

スー 私は、叩かれたり蹴られたりして目の周りや体にあざの出来た生徒たちに対してサポートグループを行ったことがあります。また1年以上複数の学校で連続していじめが発生して問題となっていた、期間の長いケースにもかかりました。

しかしサポートグループは小学校で使用することをお勧めします。その年代の生徒たちであれば通常それほどひどい危害を加えることはありません。小学校においてサポートグループを用いることを勧められないケースはありませんでした。私はこのアプローチを中学校でもうまく活用したことがありますし、他の方々が中学校で活用して成功した例も知っていますが、どんな場面でもこの方法が必ず使えると勧めているわけではありません。例えば十代の女子生徒が2、3人の男子生徒に性的暴力を受けたケースがありました。その時はこの男子生徒をサポートグループに加えることに違和感を覚えました。（これをいじめと呼ぶのかについては疑問がありますが、地元のニュースだと、最近では学生による殺人までもがいじめと表されていました。）被害が深刻なケースでは警察が関与することが多くありますが捜査を妨害するようなことは決してたくありません。通常その間生徒は登校を控えさせられるものです。中学での深刻なケースの場合、求められれば解決志向ブリーフセラピーを“被害者”支援のために行います。私はゲイル・ホルドルフとともに、主に中学生以上の生徒に対してSFBTを用いた成功事例に関する論文¹を書いています。サポー

¹ Using solution focused brief therapy in individual referrals for bullying

トグループが中学校で使われることがふさわしくない理由がほかにもあります。それは生徒がほかの生徒が自分の問題解決に加わることに全く同意しないことがあるからです。そして私はその考えを尊重したいと思います。

興味深いことにいじめ防止プロジェクトでは‘いじめた子’の紹介がなされることはまれで、ほとんどのケースで‘いじめられた子’が紹介されてきます。私は今、行動支援のサービスにも非常勤でかかわっていますが、突然暴力的になるというような子が怒りのコントロールを必要として紹介されてきます。他の子をいじめてしまうということも、話の中にのぼることがあります。こういった個々のケースの場合には SFBT のアプローチを用いて、‘おだやかになる’ ‘学習をうまく続ける’ ‘学校に居続ける’ (つまり、学校から排除されない) など、本人がどのように変わりたいかに忠実に、1対1でかかわります。それは彼らが望む変化が何であれそうです。これは私が望む結果と言う面ではうまくいっていません。しかしこれまで私が使ってきたほかのアプローチよりは 良い結果となっています。他のスタッフが気づくくらい、顕著な進歩を生み出すのは難しいのです。いつもは、行動面で深刻な困難を抱えている子供たちにより良い結果を出すために、教師やそのほかの学校関係者に対して直接解決志向の方法を用いています。

コート 最後に聞きしたいのですが、このアプローチを使ってみようと思う先生方に何か実践面での提案があればお願いします。

スー 特別な訓練や研修は必要ありません。ただ何かいつものやり方と違うことをしてみようという意思があればいいので学校関係者にとってとても使いやすいものだと思います。また実践例を読むと、とても役に立つと思います。「解決のための面接技法」や先に紹介したに Solutions in Schools の私の担当した章に書かれていますので良かったらご覧ください。

私の Solutions to Bullying は絶版となっているので新しい本²が間もなく出版されるのを心待ちにしています。サポートグループを運営していく人に覚えておいてほしい私からの提案は、子供たちが学校で幸せに過ごすためのアイデアはグループから挙がるものでなくてはならないということです。子どもたちに情報を与えたりやアドバイスを出したくなる誘惑に打ち勝ってください。私が学校でサポートグループを実施しているところを見た人は、みなそうですが、私が全くいじめについて語らないことに驚きます。これは、「被害者」の子との話し合いにおいても、グループ運営においても共通していることです。私の知っている限り、このアプローチを実施した人は皆この方法を大好きになっています。学

Sue Young; Gail Holdorf

<http://cehs15.unl.edu/cms/uploads/2-524-Sue%20Young%20BSFC.pdf>

² 「学校で活かす いじめへの解決志向プログラム」個と集団の力を引き出す実践方法

Sue Young (スー・ヤング) 著 黒沢幸子 監訳 金子書房

<http://www.kanekoshobo.co.jp/np/isbn/9784760821655/>

校関係者や子供たちは解決志向で進めることが、いかに効果が高いかを身を持って学習しています。私からの提案は、「ガイドライン通りに、そしてシンプルに」ということです。もっとも励みとなることは、このアプローチをうまく使えば、解決志向サポートグループの影響で、そもそもいじめが起りにくい風土、精神が、学校に生まれるということです。

References

1. Y. & Rees, I. (2001). Solutions in Schools: Creative Applications of Solution Focused Brief Thinking with Young People and Adults. London: BT Press
2. De Jong P. & Berg I.K. (2008). Interviewing for solutions, 3d ed..Brooks/Cole.
3. Young, S. (1998). The Support Group Approach to Bullying in Schools. Educational Psychology in Practice Vol 14, No 1, April 1998
4. Young, S. & Holdorf, G. (2003). Using solution focused brief therapy in individual referrals for bullying. Educational Psychology in Practice, 19(4), 271-282.
5. Young, S. (2002). Solutions to Bullying. NASEN.

<http://articlescoertvisser.blogspot.com/2008/02/support-group-approach-interview-with.html>